

ダルマーニュの他の二つの著作

助手（西洋服装史） 斎藤 多香子

前号で紹介した、アンリ＝ルネ・ダルマーニュ（Henry-René D'Allemagne (1863～没年不詳)）の著書は、いずれも生活史の資料として見落とせぬものであるが、今回はその中から、『気品ある鷺鳥の遊び』（Le noble jeu de l'oie, Gründ, Paris, 1950. 798-A）と、『プリント生地』（La toile imprimée, Imprimerie générale lahure, Paris, 1942. 753-A-1）を加えて解題してみたい。ダルマーニュは、パリ古文書学院出身の著述家、美術史家であるが、玩具、版画、家具付属品、布地などの幅広い収集家でもあった。彼の名で編まれた書物には、その収集品を系統立てて図版で示し、それに解説を加えた形式のものも多い。この二冊はその代表的なものの一部である。

前者の『気品ある鷺鳥の遊び』は、内容が二部に分かれている。前半部は、1640年から1950年までの48枚の鷺鳥の遊び（フランス双六）の復刻にパリ大学教授をしていたルネ・ポワリエが解説を付したもので、序文は国立工芸学校で講義をしていたギヨム・ジャヌーが書いている。後半部はやはりダルマーニュの収集したマルシェの『タブロ

ー・ド・パリ』（これは最近日本でも新評論社から翻訳本が刊行されたし、本館にはその手彩色原本も所蔵されている）で、当時国有調度品学術担当官だったジュリエット・ニコラウスが解説を担当している。前半部・後半部共、生活・風俗への知的関心という同一主旨のもとに合わせて編まれたものと考えられる。ここでは史料価値から見て、特に前半部を紹介したい。

まず、ジャヌーによる序文では、48枚の鷺鳥の遊びの絵柄が題材別に分類され、かつ歴史の変遷をも踏まえて21ページにわたってかなり詳しく説明されている。さらに本文では、ルネ・ポワリエが歴史的に解説を加えているが、ここでは文芸に見出されるこの遊びの記述を中心に、なぜ気品ある遊びであったのか、15、16世紀にはどのような遊びであったのか、などが考察されている。続けて、48枚の絵柄のそれぞれに、印刷年、印刷店、その住所と、絵柄の説明が記されている。例えば図①は《ギリシア風を再現した気品ある鷺鳥の遊び》というタイトルの絵柄である。鷺鳥や橋を含む典型的な63マスのもので1750年にパリのサン・

マルタン通りにあったドーモン店で印刷されたと解説されている。印刷年をポワリエがどのように判断したのかは明らかではなく（絵柄には印刷年が記されていないものが多い）「1743年から1762年にかけてギリシア風が確立した」というジャヌーの説（序文p.8）から推定したものと思われる。

①「ギリシア風を再現した気品ある鷺鳥の遊び」
一七五〇年頃、パリ「ドーモン店」(P. D. M.)



ともあれ、この図①の絵柄は、とりわけ19～20世紀に印刷されるさまざまな変形形の原型を示している興味深い。当時の大人も子供も、二つのサイコロを手にはらはらしながら遊んだのであろう。鷲鳥にぶつかったら進めない、橋に来たら飛びこせる、迷路に出合ったらひっかえさなきや……。

図②は変形の一つで、1815年頃とされている《ためになる民族の遊び》というタイトルの絵柄である。興をそそられるのはNo.42の日本の箇所である。入国が禁止されているため旅行者は追い返され、No.30まで戻ると説明されている。他の国々の風俗も、当時のフランス人がどの程度の捉え方をしていたのかを知るうえで格好の資料となろう。

この他にも、ラ・フォンテーヌの寓話や、流行の服飾を題材にしたものなど豊かな楽しみを見る者に与える絵柄ばかりである。

次に、『プリント生地』を紹介したいと思う。これは、18世紀後半から19世紀前半期にかけての主にフランスでプリントされた布地と17-18世紀にインドから舶載されたプリント生地の合計236枚の図版と、インド更紗の模倣に始まったフランスでのプリント生地生産がどのような経過をたどってきたのかを記されている。この解説は美術史

家で応用芸術に著作の多いアンリ・クルツォが担当しており、全体の構成は5章から成っている。

I. 1686年以前のインド布とインド更紗の模倣

II. インド更紗の輸入禁止(1686～1759年)

III. プリント生地^{プリント}の自由生産(1759～1786年)

IV. 工業生産の歴史

V. インド更紗貿易、プリント生地と黒人売買

という章立てで、豊富な史料に基づいて論じられている。また、ダルマーニユの収集した布地と各地の美術館所蔵の布地から作成された、236枚の図版は、花柄、風景柄、建築物の柄、宗教柄、神話の柄、歴史に題材をとった柄、中国風の柄……などに分類され、どれも表現力を持ち、そして、改めて捺染柄における日本とフランスの差異を認めさせるものばかりである。図③は中国柄の一枚で1785年にパリ近郊ジュイのオーベルカンプの工場で作られたものである。

ダルマーニユのこうした数々の収集品は“価値ありし物の声”として、われわれにこれからも生活自体の意味を問いかけていくことだろう。

③「ダンスの時間」と名づけられたプリント柄
一七八五年、ジュイ布、オーベルカンプ(Pl. No. 182)



②「面白くてためになる民族の遊び」
一八一五年頃、パリ、パセ店(Pl. No. 45)

